広域遺跡群詳細分布調査 2

西牟婁地方

広域遺跡群詳細分布調査概報

昭和63年3月30日
和歌山県教育委員会

序

和歌山県南部の西牟婁地方は、古くから白炭（紀州備長炭）の産地として知られており、現在でも炭窯跡が散在している地域でもあります。また、銅の産地としても知られています。

和歌山県では、大規模な遺跡あるいは、複数市町村にまたがって分布する遺跡の詳細分布調査を昨年度から実施していますが、本年度は、西牟婁郡内に散在する銅製（精）錬所跡とされている遺跡を対象に調査を行いました。

今回の調査結果から、銅の製（精）錬所跡と考えるより、むしろ松煙採取のための施設ではないかと思われる貴重な遺構が検出されました。まだまだ解明を必要とする点も多く残されておりますが、ここに調査の成果をまとめ概報を刊行する次第であります。本書が当地方の文化・産業の歴史を知る上での一助となれば幸甚です。

最後になりましたが、調査にあたり種々御協力をいただいた関係各位並びに地元の皆様に深く感謝の意を表し、厚くお礼を申し上げます。

昭和６３年３月

和歌山県教育委員会

教育長　高　垣　修　三

例　言

1．本書は、国庫補助事業昭和62年度広域遺跡群詳細分布調査の概報である。
2．詳細分布調査は、財団法人和歌山県文化財センターに委託し実施した。
3．調査にあたっては、調査委員羯磨正信・巽　三郎・都出比呂志・藤澤一夫各氏の指導・助言を得た。（各氏とも和歌山県文化財保護審議会委員）
4．調査の組織は下記の通りである。

和歌山県教育委員会		財団法人和歌山県文化財センター	
文化財課長	梅村善行	事務局長	梅村善行
文化財課主幹	福田資次	次長	菅原正明
文化技術班々長	高橋　彬	埋蔵文化財課長	辻林　浩
〃　専門員	吉田宣夫	埋蔵文化財課主査	永光　寛
〃　〃	藤井保夫	〃　技師	井石好裕
		管理課長	松田正昭

5．調査にあたっては、富山県教育委員会桃野真晃・東京工業大学川野辺渉各氏をはじめ以下の諸氏・諸機関から御指導、御協力をいただいた。お礼申し上げたい。
安部弁雄・大原満・木下順道・玉田総一郎・谷上守児・多祢勝利・深瀬増次郎・柳川弘各氏、大塔村・白浜町・田辺市・中辺路町各教育委員会。
6．本概報は、永光・井石が執筆した。遺物写真は井石・中林都志が撮影し、遺物実測およびトレースは井石によるものである。
7．本書で使用した遺物番号は、本文・図版においてすべて共通する。

目　次

遺跡一覧表……4
序
例言
Ⅰ　調査目的……1
Ⅱ　分布調査……1
Ⅲ　発掘調査……1
Ⅳ　成　果　……2
第一図　分布図……5・6
二　遺構全体図…7・8
三　遺構実測図……9
四　遺物実測図……10
五　和田Ⅱ遺跡(一)…11
七　和田Ⅱ遺跡(二)…12
七　和田Ⅱ遺跡(三)…13
八　和田Ⅱ遺跡(四)…14
九　広見川Ⅰ遺跡…15
十　遺物(一)……16
十一　遺物(二)……17
十二　遺物(三)……18

Ⅰ　調査目的

和歌山県南部、西牟婁郡を中心とした山間部に、表面が溶融した砂岩や多量の焼土塊が時折り発見される。発見の要因は、林道工事・植林によるものが多く、年々増加の傾向にある。この種の遺跡は、昭和44年ズミハナ遺跡（中辺路町）の発掘調査により窯体部が検出され、銅製錬の遺構として理解されてきた。ただ遺構の性格を決定づける積極的な資料に乏しく、稼働時期についても不詳とされてきた。同様の遺跡は、『和歌山県遺跡地図（昭和58年）』によれば10箇所を数える。今回の調査は、遺構及び性格を知るとともに、分布状況を把握しょうとするものである。

Ⅱ　分布調査

調査の方法は、上記のように遺跡が山間部に立脚し、又、調査地域が広範囲に及ぶため、聞取調査を先行し、その上で現地を踏査する方法を採った。調査は、日置川・富田川流域を中心として実施した。（遺跡一覧表及び分布図参照）

Ⅲ　発掘調査

日置川流域２箇所の遺跡について発掘調査を実施した。

1　和田Ⅱ遺跡（大塔村和田614番地・調査面積約170㎡・分布図番号21）

和田川上流、宇井郷谷の一支谷に位置する。標高370ｍ前後である。調査地点は、約30度の南向きの斜面地で、上下二段（比高約３ｍ）のテラスが存在する。

遺　構　下方のテラスから後方の斜面地にかけて窯跡が、上方のテラスには三方に壁面を残す偏平な箱状の遺構を検出した。窯跡は、幅約４ｍ・奥行約2.2ｍの範囲をもち、４箇所の焚口をもつ。焚口は、高さ約0.2ｍ・幅約0.18ｍ、奥に向かうに従い、高さ・幅共に規模が増え燃焼部（西から順次１～４号と呼称）を形成する。燃焼部の後方に接して約60度の傾斜角で立ち上がる煙道が見られる。燃焼部は全長1.4～1.5ｍで、床面の傾斜角は約９度で煙道方向に上昇する。床面は浅く舟底状に凹む。煙道は下端で幅約0.5ｍ・上端で約0.2ｍ、全長約1.4ｍである。燃焼部・煙道の内面は、窯材の砂岩及び粘土の目地材が高熱のため溶融している。偏平な箱状の遺構は、前面（南端）が白炭窯構築時と考えられる土取坑のため攪乱をうけているが、幅約4.3ｍ・奥行約2.95ｍ、やゝ外上方に開く壁は高さ約0.47ｍを現認できる。この遺構は、スサを混入した粘土を塗り込め、内部全面に煤の付着が

顕著である。煤は床面でパウダー状を呈し壁面ではタール状になる。この床面と窯体部焚口との比高は約2.60m、煙道下端と箱状遺構の奥壁の間隔は約6.7mである。その他の遺構として、窯跡の東側に上方のテラスに向かう階段状の石積みが認められる。

2　広見川Ⅰ遺跡（中辺路町野中2258番地・調査面積約36㎡・分布図番号11）

日置川上流、広見川左岸段丘上に位置する。標高420m前後である。調査地点は、山裾部と段丘面の屈曲部にあたる。

遺　構　4本の燃焼部・煙道と偏平な箱状の遺構を検出した。燃焼部（北から順次1～4号と呼称）は、開懇時に破壊をうけており、1号では側壁の一部のみが遺存する。床面の傾斜角は約10度で煙道に向かい上昇する。全長は約0.9m遺存しており、幅は最も広い部分で約0.5m。床面は浅く舟底状に凹む。煙道は傾斜角約45度をもち、全長約1.3mを測る。窯跡の幅は約4.2m（焼土範囲）・奥行約1.5mである。林道広見川線を挟んだ東側に、幅約4.4m・奥行約1.1m・壁高0.2～0.3mが遺存する箱状遺構が検出できた。床面と煙道下端との比高は約1.5mを測る。奥壁と煙道下端との間隔は約6.9mである。

3　出土遺物（和田Ⅱ・広見川Ⅰ遺跡）

今回の調査で出土・採集した遺物の大半は、堅く焼きしまった褐色ないし黄褐色を呈する土器（甕）である。多くは体部外面に粗い叩目痕をもち、下半に篦削りを加えている。例外的には、広見川Ⅲ遺跡で採集（**26～29・31**）したものの中に波状文が施される。内面は刷毛目調整が施され、頸部以下の内面には、厚いもので3㎜以上もの煤がパウダー状或いはタール状になり付着（**34**）する。煤は外面の底部付近（**32・33**）にもみられる。又、煤の付着状態が希薄なものもある。平底の底部は大半が打ち抜か（**30**）れているが、焼成前に篦で切り取（**31**）られているものもみられる。又、(**25**)は頸部外面に鉄線が巻きつけられた状態で遺存していた。唐津焼・碗（**36**）は褐色の釉が施され体部下半は露胎である。（**37**）は刷毛目の唐津焼・碗である。今回の調査では、2点の唐津焼・碗を除くと、出土した遺物は煤の付着した土器のみである。これらの土器は今のところ他に類例がなく、これらをして遺構の時期決定資料とすることは出来ない。強いて求めるなら、和田Ⅱ遺跡の旧表土層出土の（**36・37**）に江戸時代前半という大雑把な年代をあえることができよう。

Ⅳ　成　　果

今回の詳細分布調査により得られた成果は次ぎの通りである。

①これらの遺跡の分布範囲は、現在のところ中辺路町を中心とした西牟婁地方に集中している。②遺跡は山間部の谷間に占地する。③遺構の構築の方法として、傾斜地にテラスを

造成するもの(A類)とマウンドを造成しその頂部にテラスをもつもの(B類)に分類できる。④窯体は4本の燃焼部・煙道で構成される。⑤燃焼部・煙道は、砂岩で構築され石と石の間は粘土が充填され、その表面は溶融している。⑥偏平な箱状の遺構は、現在全容が明らかではないが、窯体の後方に位置し内部全面に煤が付着している。煤はパウダー状・タール状を呈している。⑦煤は、箱状遺構の周囲にも顕著に認められる。又、遺構背面の傾斜地にも及んでいる。

以上のことから、これらの遺跡には、煤の付着した偏平な箱状の遺構と高熱をうけた窯体部の存在が確認できる。又、傾斜地を利用して、下位に窯体部、上位に箱状遺構を配した位置関係も窺うことができる。次ぎに、内面に煤の付着した土器は、遺構周辺に出土するが、煙道上端に口縁部を下にして伏せ置かれたズミハナ遺跡の調査例、或いは遺物の項でふれた煤・鉄線の付着状態を考慮すると、煙道に直結し土器を何個体も連結させ、又、それらを補強させる目的で鉄線を巻きつけたものと理解できる。そしてこれらは窯体部と箱状遺構を結びつけた連結部であると推察される。

遺跡の性格を考察してみると、注目される点は出土遺物が煤付着の土器に限られるという事実である。又、上記したように箱状遺構の内部は煤の付着・集積しか見られないことである。従ってこれらの状況から導きだされる遺跡の性格は、従来いわれてきた銅製(精)錬関係の遺跡ではなく煤そのものを採取する目的で構築されたと考えることができる。

煤は、当然ながら松材を燃焼させ得られる松煙であろう。松煙の採取は、紀南地方において近代盛んにおこなわれたもので、田辺には松煙問屋も存在していた。又、既に18世紀初頭の『和漢三才図会』にも太平墨の原料として紀州熊野の松煙が記載されている。

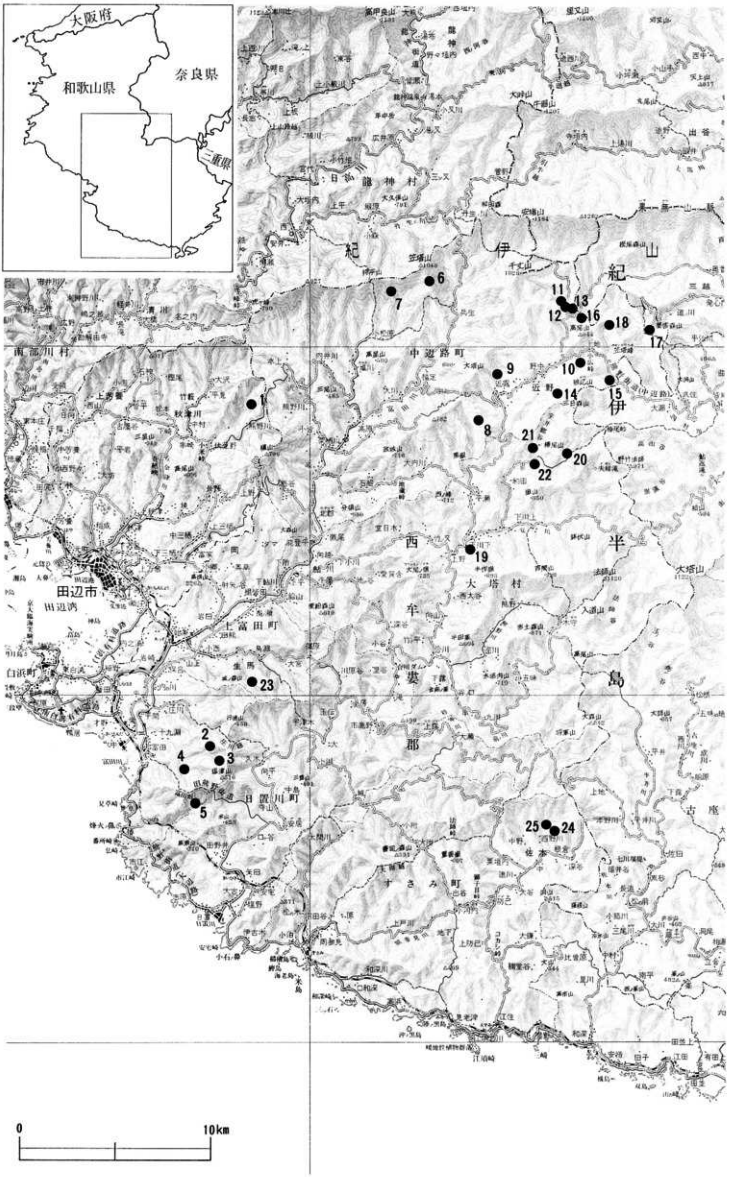
近代における松煙の採取方法は、松煙小屋と称する細長い作業小屋で、松脂のよく肥えた小片を焚くことにより得られるものである。今回検出した遺構をもとに採取方法を考えると、規模の小さい4箇所の焚口から小片の松材を投げ込み燃焼させる、排煙が土器連結部を通り箱状遺構（以下集積部と呼称）に至る。ただ連結部は単に煙を集積部に繋げる導管としての目的だけでなく、ここを通過することにより温度を低下させ煤の発生をうながしたものであろう。集積部にみられたタール状の煤は集積部内面の高温化によるものであり、これは燃焼部の溶融との関係が考えられる。溶融が顕著でない広見川Ⅰ遺跡においては煤がパウダー状を呈している。

以上、西牟婁郡を中心として分布するこれらの遺跡群は、松煙採取の遺構とする可能性が極めて高かいものといえよう。しかし、まだ解明を要する点も多々あり今後慎重に検討を重ねていきたい。

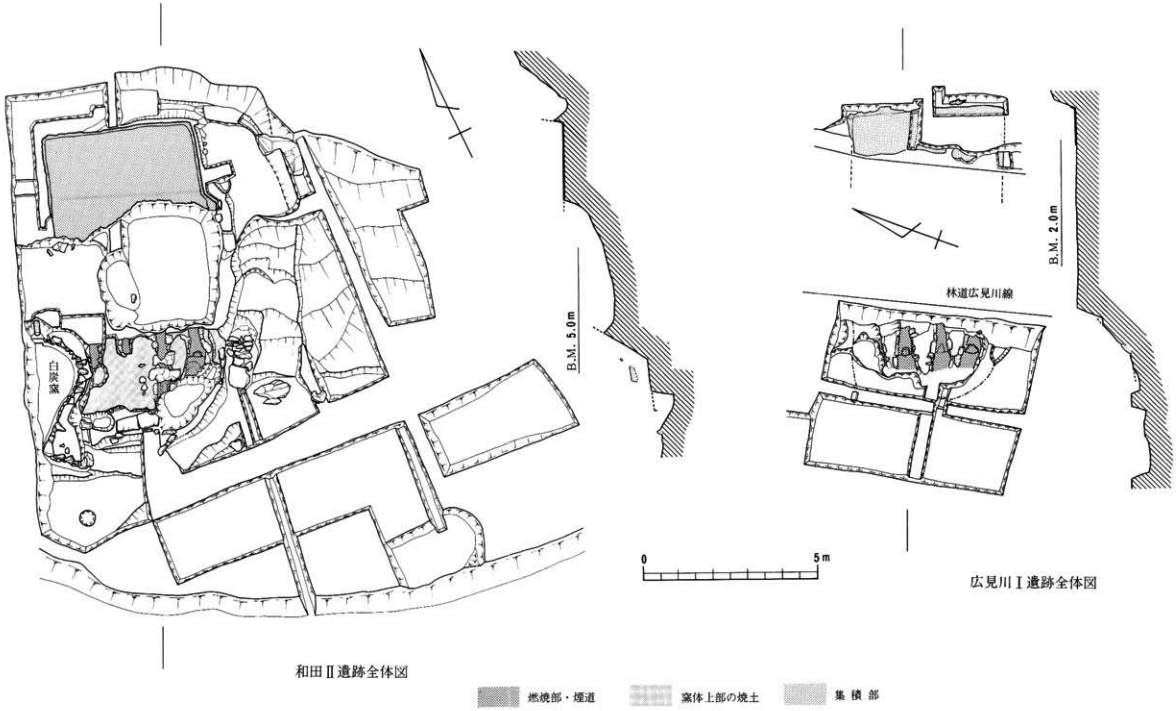
遺跡一覧表

番号	遺跡名(含仮称)	所在地	立地		備考
1	目吉良	田辺市伏菟野	山麓	◎	煙道
2	東富田	白浜町十九淵	〃	◎	「年輪」第4号・南紀高校
3	〃 Ⅱ	〃 〃		△	〃
4	〃 Ⅲ	〃 〃	山麓	○	〃
5	椿			◎	〃
6	成川	中辺路町小松原	山腹	◎	
7	大平山	〃 〃	〃	△	土器（甕）
8	瀬ノ川	〃 近露		◎	
9	近露	〃 〃		○	煙道奥壁
10	ズミハナ	〃 野中	山腹	◎	「和歌山県史 考古編」
11	広見川Ⅰ	〃 〃	山麓台地	◎	今回発掘調査実施
12	〃 Ⅱ	〃 〃	山腹	◎	林道により破壊か
13	〃 Ⅲ	〃 〃	山麓	○	土器（甕・波状文）
14	池ノ川	〃 〃	山麓谷	○	窯体片散在
15	群谷	〃 〃		△	国道工事で埋没か
16	東ノ川	〃 〃	山麓	○	白炭窯により破壊か
17	道湯川	〃 道湯川		◎	
18	〃 Ⅱ	〃 〃		△	土器（甕）
19	嶋野	大塔村下川下	山麓	◎	煙道
20	和田Ⅰ	〃 和田	〃	○	窯体片散在
21	〃 Ⅱ	〃 〃	〃	○	今回発掘調査実施
22	〃 Ⅲ	〃 〃	〃	○	水田下
23	生馬	上富田町生馬		△	
24	佐本Ⅰ	すさみ町佐本	山麓	△	煙道
25	〃 Ⅱ	〃 〃	〃	△	窯体片散在 林道により破壊か
26	中津	中津村		△	「年輪」第4号・南紀高校

◎ 和歌山県遺跡地図に記載　○ 今回踏査　△ 未踏査


大阪府
奈良県
和歌山県
三重県
紀伊山
紀伊半島
南部川村
中辺路町
田辺市
上高田町
白浜町
日置川町
大塔村
十津川村
古座
0
10km

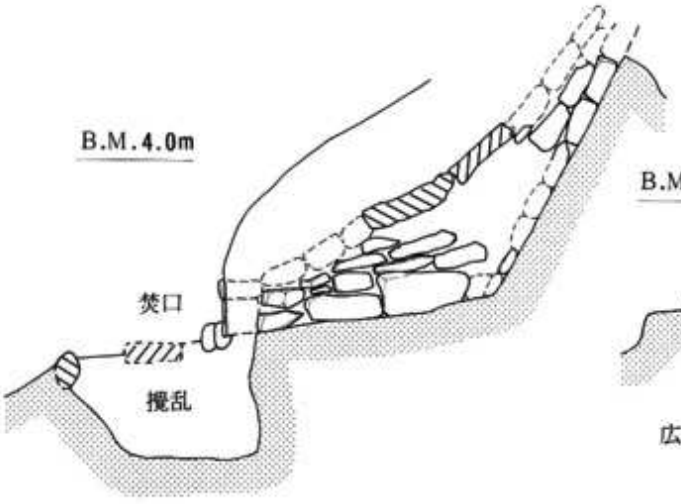
第一図　分布図



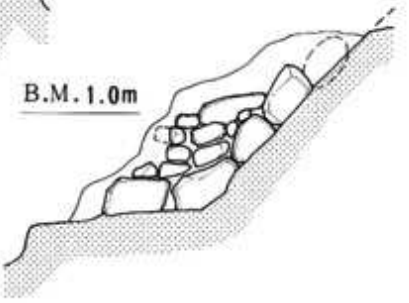
和田Ⅱ遺跡全体図

広見川Ⅰ遺跡全体図

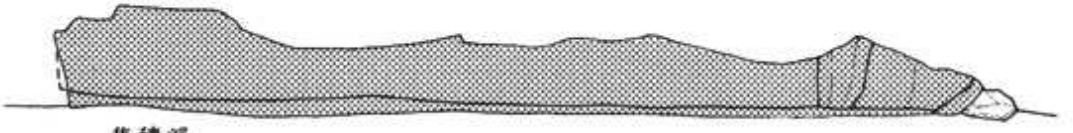
第三図　遺構実測図



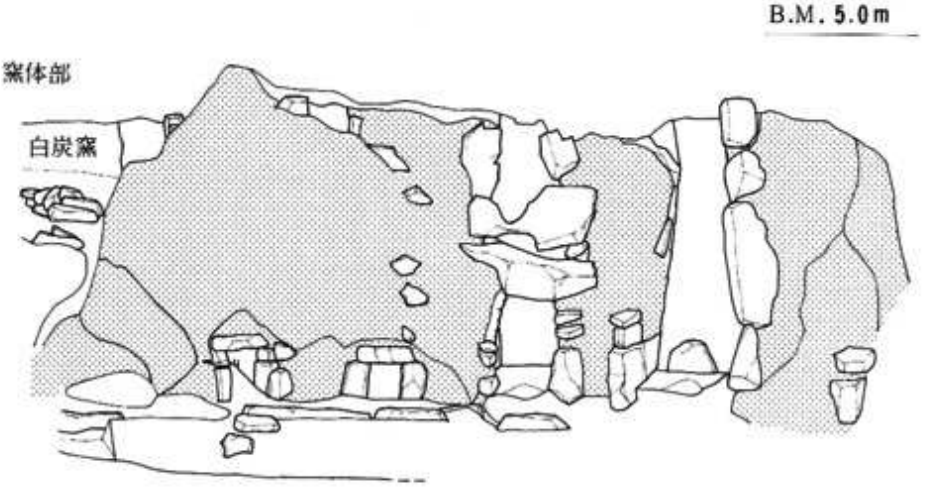
和田Ⅱ遺跡 煙道3西壁



広見川Ⅰ遺跡 煙道3北壁

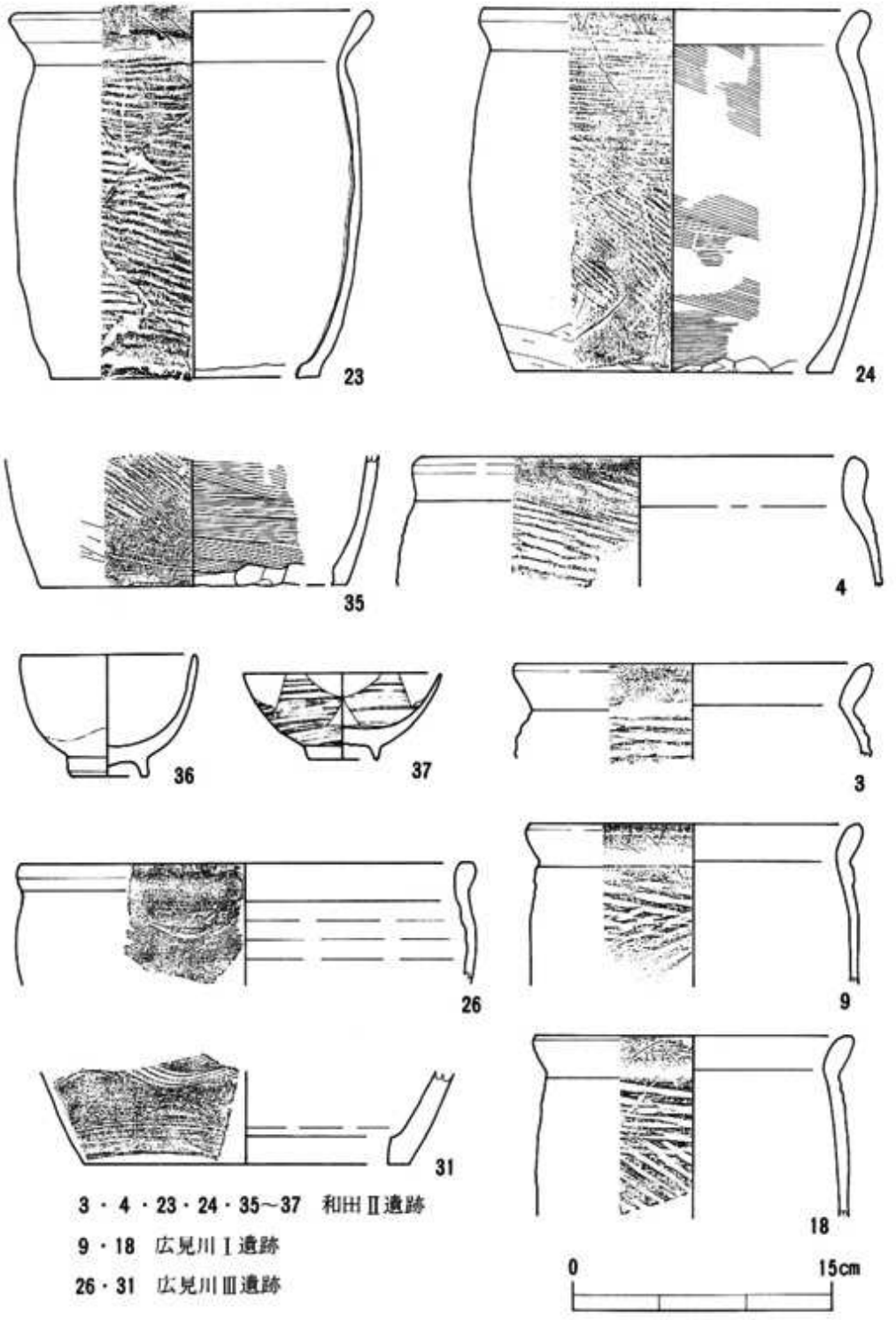


集積部



和田Ⅱ遺跡 窯体部・集積部

第四図　遺物実測図



3・4・23・24・35～37　和田Ⅱ遺跡

9・18　広見川Ⅰ遺跡

26・31　広見川Ⅲ遺跡

第五図　和田Ⅱ遺跡(一)

(上) 和田Ⅱ遺跡調査前(東から)　　(下) 和田Ⅱ・調査区全景(南から)

第六図　和田Ⅱ遺跡(二)

(上) 和田Ⅱ・窯体部と集積部(南から)　　(下) 和田Ⅱ・焚口(南から)

第七図　和田Ⅱ遺跡(三)

(上) 和田Ⅱ・燃焼部・煙道部(南東から)　(下) 和田Ⅱ・集積部(東から)

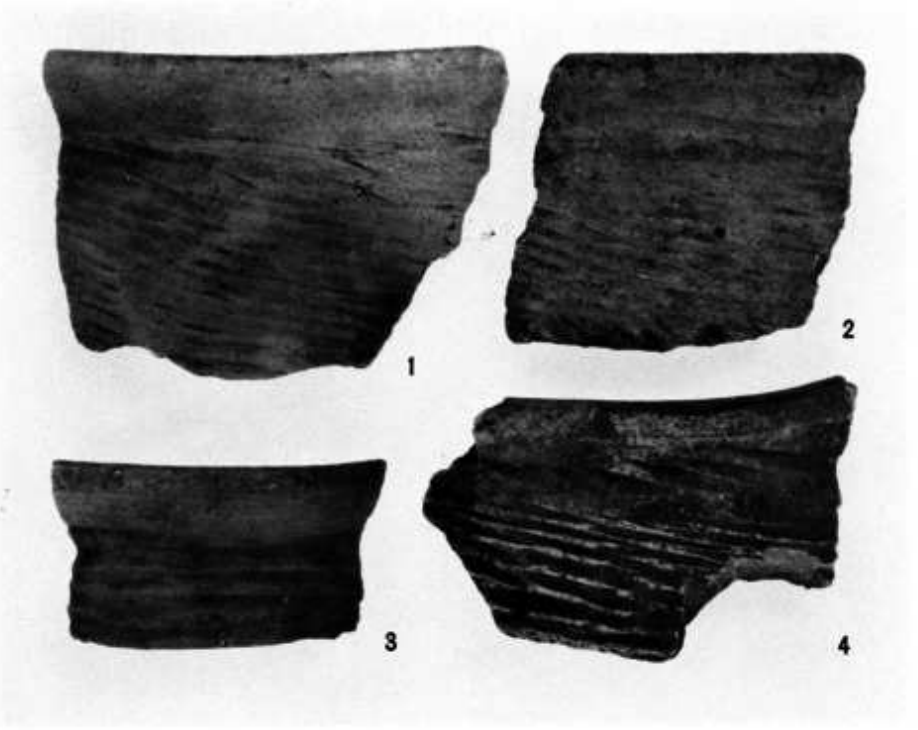
第八図　和田Ⅱ遺跡(四)

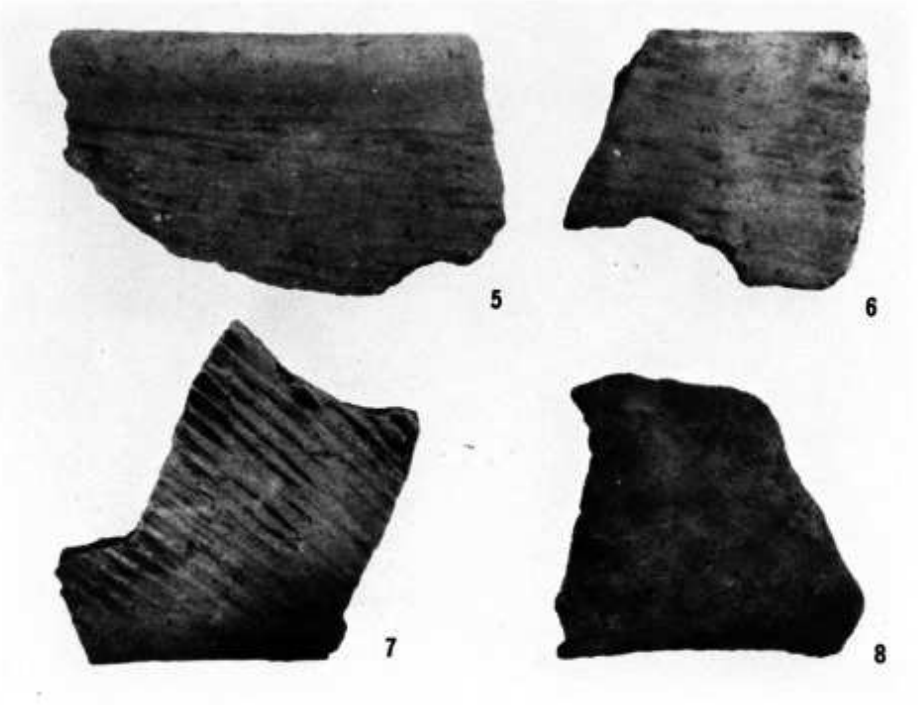
(上) 和田Ⅱ・集積部奥壁(南から)　　(下) 和田Ⅱ・窯体部東側(南東から)

第九図　広見川遺跡

（上）広見川Ⅰ・窯体部全景（西から）　（下）広見川Ⅰ・窯体部（北から）

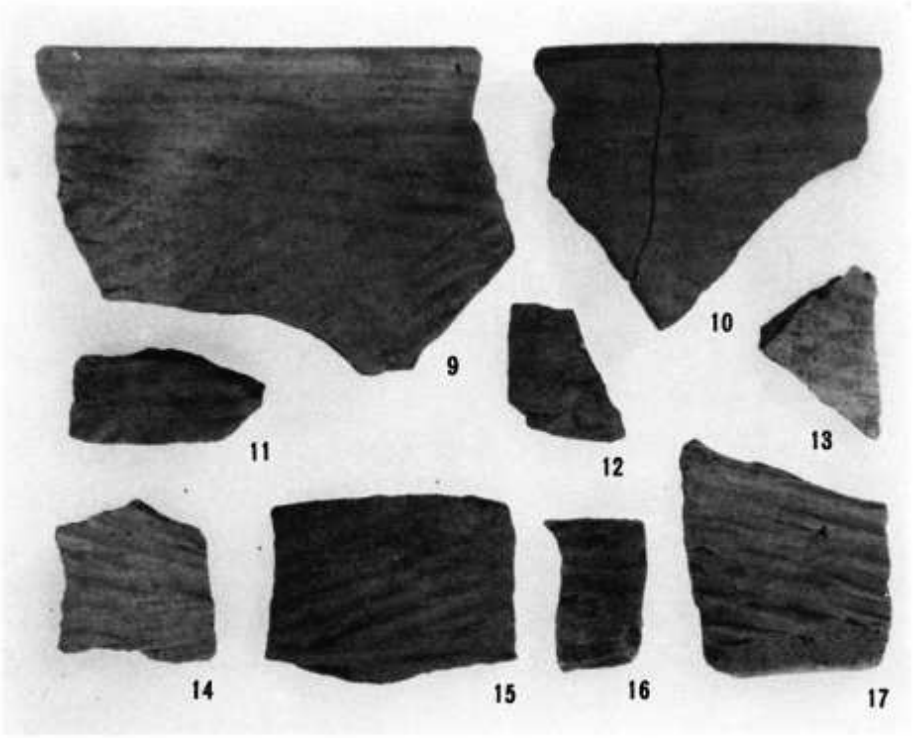
第十図　遺物(一)

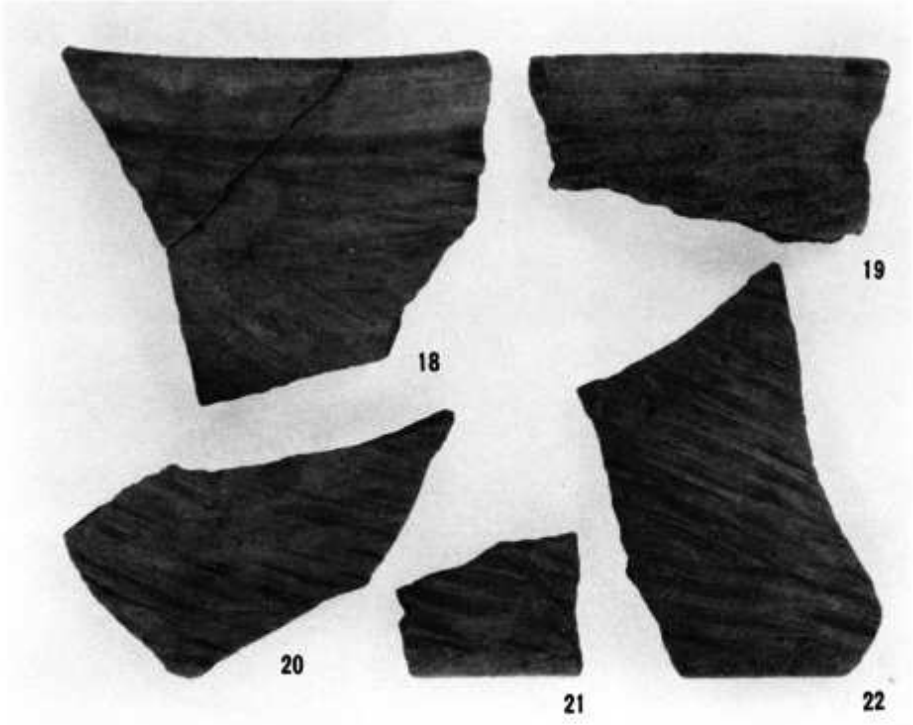




1～8　和田Ⅱ遺跡

第十一図　遺　物





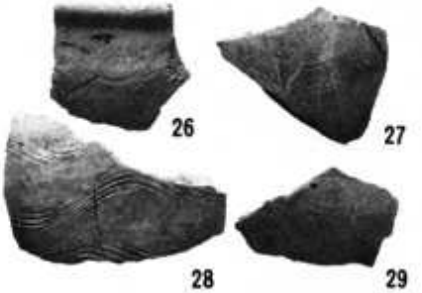
9～22　広見川Ⅰ遺跡

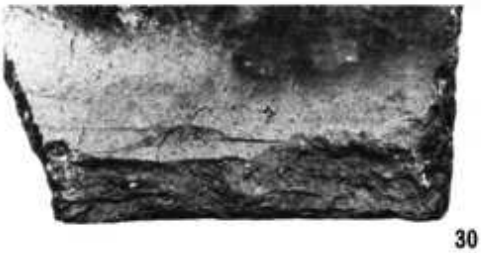
第十二図　遺物(三)

23

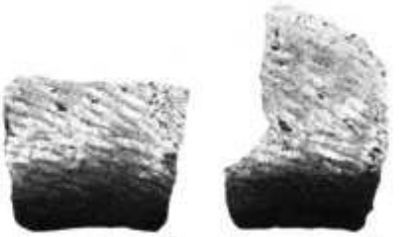
24

25


26 27 28 29


30

31


32 33

34

23～25・30・32～34　和田Ⅱ遺跡　　26～29・31　広見川Ⅲ遺跡

昭和63年３月30日　印刷
昭和63年３月30日　発行

昭和62年度

広域遺跡群詳細分布調査概報

編集
発行　和歌山県教育委員会

印刷　永井印刷所